

余暇・地域支援につなげる体育授業「ボッチャ」(パラ種目)

横浜市立上菅田特別支援学校 主幹教諭 金井 大

キーワード：スポーツ中継、見やすさ、交流、インクルーシブ

実践の概要

ボッチャの授業では、見学時の見え辛さに対応するためにICT機器を活用し、児童の意欲向上につながった。授業を生かして、ボッチャを余暇・地域活動の支援の新たな起点として交流を広げている。

1. 目的・目標

(1) 授業改善

ICT機器を活用することで、友達への関心や運動への意欲、評価の手立てが改善するかを明らかにする。

(2) 余暇・地域支援

(1)の結果として、児童・生徒の意欲が高まれば)余暇活動や地域交流でもボッチャに取り組むことで、他者との交流の機会を広げる。

(3) 問題意識

本校における体育授業の課題は、他の多くの肢体不自由の学校と共通するものであるが、運動には教員の介助が必要で、それ以外の子どもは待機となりがちである。その見学・応援時に、車いすだと視線が低く、教員が見学者の視野を遮ってしまうために、見学者には活動の様子が見え辛い。そこで、ICT機器(テレビ等、apple TV、iPod・三脚等)を活用して中継や録画を見せることで、従来、見えにくかった運動の様子が見えやすくすることを考えた。

次に、特別支援学校の子どもの余暇や地域での活動は家庭によるところが大きい。ボッチャは障害の有無にかかわらず気軽に楽しめるため、本校のどの学年でも取り組まれており、授業での意欲向上が、余暇・地域支援の取組につながると考えた。

2. 実践内容

2.1 授業改善 (ICT活用で見やすく)

(1) 本校の体育授業の特色

例えば、上肢に麻痺があって「器械体操」(マット、鉄棒、跳び箱)を行くことが困難な場合や、下肢に麻痺があっ

て「陸上運動」(走り幅跳び、走り高跳び)を行うことが困難な場合、どのように学習内容を扱うべきか。そもそも、身体の動きに困難が生じることの多い肢体不自由児が体育授業を行うことの意義は何だろうか。

現行の特別支援学校学習指導要領には、「児童又は生徒の障害の状態により特に必要がある場合には、各教科及び外国語活動の目標及び内容に関する事項の一部を取り扱わないことができる」(重複障害者等の教育課程の取り扱い)とあり、この取り扱いを適用することができると考えられる。しかし、それは動き辛いからと言って、安易に運動する機会を失わせてよいということではない。現行の小中学校学習指導要領・体育科の目標は、「心と体を一体ととらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる・・・(中略)・・・健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」とあり、体育科でつけるべき能力は運動の技能だけではなく、運動への関心や意欲、運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら工夫する力も含まれる。この目標に向かって本校では学習内容を心身の発達の特性等に応じたものに変更している。その際の考慮事項として、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領(第2章各教科)では、次の5点を挙げている。①体験的な活動を通して表現する意欲を高める、②身体の動きの状態、生活経験の程度に応じて、指導内容を精選する、③身体の動きやコミュニケーションは自立活動と密接に関係付ける、④学習時の姿勢や認知の特性に応じた指導内容の工夫する、⑤身体の動きや意思の表出の状態等に応じて、適切な補助用具・手段、コンピュータ等の情報機器の有効活用する、である。本実践のICT活用は上記④や⑤の工夫にあてはまる。

本校の教育目標を各学部で読み比べると、「積極的」「可能性」「良さを伸ばす」「生涯を通して」「健康で丈夫」などのキーワードが重複して用いられている。このような目標のもと、本校の体育授業は計画されている(表1)。運

動領域を色分けすると、年間の流れや運動内容が概ね共通していることが分かる。「体づくり運動」(大型遊具などを使った粗大運動で加速や平衡、触感などの感覚を刺激)、「陸上競技」(車椅子などで走る等の動き)、「水泳」(浮力を使ったリラクゼーション、水遊び、泳法)、「球技」(ボッチャ、ボーリング、風船バレー、風船サッカー)といった内容である。「球技」では、わずかな力でボールを転がる、飛ばす、弾ませられるようなアレンジ(「風船○○」)をしている。しかし、ボッチャはどの学年でも行われているが、それはボッチャが四肢麻痺の障害者が楽しめるスポーツとしているので、アレンジ不要でできるからと考える。

(2) 本実践の概要とICT活用のメリット

小学部4年の「ボッチャ」の単元計画は次の通りである。(表2)。それぞれの場面でのICT活用を振り返る。

【導入】試合を「*なまちゅーけい」(名前の字幕付)で中継すると、テレビのスポーツ観戦をしているような臨場感があり、友だちの投球を真剣に見ることができ、意欲の喚起につながった。

【自分を見る練習】iPadで投げる場面を撮影し、後にフォームをチェックして、最適な投げ方を決める手がかりとした。自分の体の動きを知ることにつながり、何度も撮影しては腕の振りを確かめる児童の姿が見られた。また、友だちを撮影することで、友だちの工夫等を意識したり、声を掛け合って協力したりする姿が見られた。

【近づける練習】床上で展開されるボールに注視できる児童がいる一方で、未定頭で車いすの背もたれがリクライニングの状態で過ごしている児童、注視が困難な児童も存在する。ICTを使ってジャックボールを中心に床面を撮影し、それをスクリーンに投影することで、スクリーン画面に注視し続けられる児童がいた。

【試合】これまでの中継の実績から、過度に盛り上げてしまうと、試合への集中力や友だちとのコミュニケーションを阻害してしまう恐れがあったため、中継はジャックボール周辺の定点撮影のみに絞った。試合経過を確認するために見ている児童がいた。

【ルール理解】高等部の「ボッチャ」の授業で、下学年の教科学習が可能な生徒が、中継を使ってボッチャのルールを改めて確認することができた。これまでは、なんとなくその場の雰囲気であつたつもりでいたが、ルールを全く理解していなかった。ICTを使用したことで、そのことに本人が分かったのである。ボール同士の距離感などは、車イスにのつたままでは分かりづらく、真上からの映像があることで、状況が分かりやすくなったと考えられる。

2.2 余暇・地域支援

平成30年の9月より『放課後ボッチャ同好会』が始動した。本会の目的は、余暇・地域支援の強化である。ボッチャのボールや器具が充実し、体育館を要する本校を拠点に余暇活動を支援するとともに、地域交流の場とすることである。また、その中で子どもの技術が向上し、大会出場を通じて選手として主要な大会に出場できるよう子どもが将来誕生することも期待している。活動内容は月1度の練習と年4回程度の大会出場、それと合わせて小中学生との交流、協力促進を行う。児童生徒対応は保護者に委ね、運営や学校間連携を教員が行う。体制としては管理職2名、運営教員3名・運営協力教員7名で臨んでいる。発足に際しては、2020年までの期間限定で取り組んでいるが、次

年度、本格的に稼働する。これまでの取組もあり、すでに広報誌に取り上げられるなど注目を浴びている。

平成30年9月にはプレ活動として一部児童と近隣小学生が顔合わせをして初練習を行い、その合同メンバーで10月のボッチャ神奈川県大会に出場した。正式発足の11月には全校から有志の子ども20名程度が練習に参加した。平成31年1月26日(土)には本校の子どもも有志と地域小学生がボッチャ体験会を行い、パラリンピアンとも交流を行う予定である。

3. 成果

3.1 授業改善 (ICT活用で見やすく)

①見る機会の保障 体育館などの広い場所では漠然と視線を送っている児童が相当数いる中で、TV画面であれば注目して見ることができ児童もいる。特に注目してほしい活動や友だちの様子を意図的に映し出すことで授業者がねらった場面に注目させることができる。

②セルフ・モニタリング フォームチェックの際、自身を客観的に見ることができ、有用である。それが難しくても、自分が画面に映るとうれしそうにしている児童もいた。

③友だち意識 普段、人を注視できない児童が、友だちの表情がスクリーンの大画面に映し出されると、見ることができた。

④振り返り方法の改善 発語が困難な児童にとっては授業の振り返りとして自分が映されることで周りの大人や友だちが反応することで嬉しそうにしていた。また、記憶の保持が難しい、直前の事柄だけ話す児童にとって、自分の様子を想起する手がかりになった。教員の中には、「無表情な生徒だと思っていましたが、活動の直前・直後にニコリとしている様子をapple TVで捉えてもらい、ちょっと見方が変わった」という感想も聞かれた。子どもの実態や評価を教員相互に確認し合える場となった。

3.2 余暇支援・地域支援

ボッチャを通じた交流が、障害の有無にかかわらず、余暇の楽しみ方を見つける起点となってきている。また、ボッチャが障害をもつ人の理解や地域とのつながりの手がかりになっている。

4. 今後に向けて

「児童の視線」を意識した授業づくりを基に、今後は、児童の積極的・客観的評価(「できない」あるいは「分かっている」と勝手に決めつけない)を行うことで、実態把握の精度を上げたい。また、視覚だけでなく、聴覚、触覚も含めて、認知特性に合った授業づくりに発展させたい。また、余暇・地域支援では教員が子どもの将来やこれからの社会に目を向けることが必要である。目的課題意識をもった教員が社会とつながり、取組を開始することで、自信ややりがいをもてれば、さらなる教育的・社会的効果を生むことができるだろう。

具体的には、近隣の地域の小中学校へのボッチャやICTのセットを長期貸出することで、ボッチャが広がり、そこに新たな人との交流が生まれる素地ができると考え、そのような取組を開始する予定である。

*なまちゅーけい：本校で開発した授業中継用アプリ。パナソニック教育財団による学校研究助成(一般)において開発。『学習デジタル教材コンクール』文部科学大臣賞(団体)。

表1 本校の体育授業年間指導計画(平成29年度)

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
小学部	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ
中学部	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ
特別支援	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ	ボッチャ

表2 小学部4年「ボッチャ」単元計画

次	時間数	概要	ICT活用
1次(導入) [試合体験]	1時間	ボッチャの生中継試合で選手の気持ちになる。	・人物やボールを中継(iPod-Apple TV-スクリーン) ・同時中継(無線HDMIで複数台TVに同じ映像を飛ばす)
2次(展開) [練習]	4時間	ボッチャの「技」を磨く。 ①近づける。 ②投げ方を見つける。 ③あてる。 ④2年生に練習方法を伝える。	①～③をローテーション ④ボールを中継(iPod-Apple TV-スクリーン) ⑤人物を録画しフォーム確認(iPad複数台) ⑥なし ⑦は①～③のいずれか
3次(まとめ) [試合]	2時間	友だちと順番や作戦を決めて、試合をする。	・ボールを中継(iPod-Apple TV-スクリーン)